

熊本民謡「田原坂」小考

植 木 朝 子

菊池寛は、昭和十年に刊行された随筆『話の芥箱』の中で、熊本で聴いた「豪傑節」に触れ、「右に血刀左にたづな 馬上豊ゆたかに美少年」の一句を気に入って、「右に血刀左に十字架クルス 馬上豊に美少年」、「右に血刀胸には十字架 馬上豊に美少年」と改作したことを記している。天草四郎時貞を念頭に置いたの改作であり、「これは原作よりは数等秀れてゐると思ふから、熊本の豪傑節も、僕の改作を用ゐてくれればいゝ」とまで記している（引用は『菊池寛全集』第二十四巻へ高松市菊池寛記念館 一九九五年）。以前、菊池寛と歌謡の関わりを考えた折、菊池には、歌謡の典拠をさほど尊重せず、自由奔放に改変して記す傾向のあることを述べた（『中世小歌 愛の諸相』第Ⅱ部第1章へ森話社 二〇〇四年）が、菊池の好んだ「豪傑節」そのものにも、詞章の追加創作を含め様々な問題がある。本稿では、この豪傑節の詞章について問題点を整理し、成立について若干の考察を試みたい。

熊本には「田原坂」の名で呼ばれる民謡もあり、「豪傑節」と「田原坂」は、どちらも七七七五の都々逸形式を持つ歌詞を連ねたもので、資料によって、同じ歌詞を「豪傑節」として収録する場合と「田原坂」として収録する場合がある。最近のものでは『日本の民謡 西日本編』（長田暁二・千藤幸蔵編 現代教養文庫 一九九八年）の楽譜や

二〇〇〇年四月五日発売のカセットテープ「熊本の民謡」（キングレコード）などにより、豪傑節と田原坂との旋律の違いを知ることができる。熊本日日新聞平成七年十二月八日付夕刊「雨は降る降る 民謡田原坂さんぽ4豪傑節 もう一つのメロディー」には、

民謡「田原坂」は昔から熊本の芸者衆が歌うものと「豪傑節」と二種類の節で歌い継がれている。「豪傑節」はもともと鹿児島民謡といわれているが、熊本音楽短大の出田敬三副学長によれば、「前者は比較的明るいメロディーで、後者は短調で荘重。いずれも日本古来のヨナ抜き音階（ファとシを使わない）の旋律です。どちらか戸惑う方も多いようですね。

と見える。今、旋律について論じる用意はないが、ここでは歌詞の成立について考察したい。以下、問題にする民謡を、一部資料では「豪傑節」とするものも含めて、主に「田原坂」の名称で呼び、「田原坂」「豪傑節」両者を合わせて考察の対象とする。

なお、第二節以降では、新聞の引用が多くなるので、最初に確認しておく、現在の熊本日日新聞は、九州日日新聞と九州新聞が合併したもので、昭和十七年四月一日から熊本日日新聞として発刊されている。また、総ルビの資料の引用においては、必要と思われるもののみ残し、後のルビは省略した。

一 「田原坂」の歌詞

二〇〇〇年四月五日発売のカセットテープ「熊本の民謡」より、「豪傑節」と「田原坂」の歌詞をそれぞれ掲げ

る。番号は私に付した。

〈田原坂〉

- ① 雨は降る降る 人馬はぬれる 越すに越されぬ 田原坂
- ② 心濡らすな 虫の音しぐれ ここは田原の 古戦場
- ③ 退くに退かれぬ 田原の嶮は 男涙の 小夜あらし
- ④ 田原坂なら 昔が恋し 男同士の 夢の跡
- ⑤ 春は桜よ 秋なら紅葉 夢も田原の 草まくら

〈豪傑節〉

- ① 雨は降る降る 人馬はぬれる 越すに越されぬ 田原坂
- ② 右手に血刀 左手に手綱 馬上ゆたかな 美少年
- ③ せくなさわぐな 天下の事は しばし美人の ひざまくら
- ④ 草をしとねに 夢やいづこ 秋のみ空に 陽が登る
- ⑤ 西郷隆盛 話せる男 国の為なら 死ねというた

当該資料によれば、「田原坂」と「豪傑節」は一番を共通にしており、それぞれ各五番までの歌詞を持っている。この歌詞を基準にして、以下、いくつかの資料から歌詞を掲げる。同じ歌詞の場合、番号を統一し、二度目以降は第

一句目のみを記した。異同のあるものはその箇所を示した。(5)以外の資料に記されるものはすべて「田原坂」の歌詞として掲げられている。

資料番号	歌	詞
(1)	①「人馬」を「陣羽」とする ⑥右手に血刀…… ⑩山に屍 川に血流る 肥薩の天地 秋さびし ⑧後半部分（明けのみに空に 日の御旗） ⑪ないてくれるな かわいの駒よ 今宵しのぶは 恋でなし ⑫どうせ死ぬなら 桜の下よ 死なば屍に 花が散る ④田原坂なら…… ⑤春は桜よ……	⑬おれの父っちゃん 位がござる なんの位か 酒くらい ①雨は降る降る…… ⑥右手に血刀…… ⑩山に屍……
(3)(2)	⑧後半部分（明けのみに空に 日の御旗） ⑪ないてくれるな…… ⑭泣くな我が妻 勇めよ男の子 戦 <small>いくさ</small> に立つは 今なるぞ ⑫どうせ死ぬなら…… ④田原坂なら…… ⑤春は桜よ……	③退くに退かれぬ…… (2)にはなし
(4)	①雨は降る降る…… ⑥右手に血刀…… ⑩山に屍……	⑧後半部分（暁のみ空に 日の御旗）

	<p>⑪ 第二句（いとしの駒よ） ⑮ 一の城とり 二の城おとし あとは御旗の 風に散る</p>
(5)	<p>① 雨は降る降る…… ⑥ 右手に血刀…… ⑩ 山に屍…… ⑧ 後半部分（明けの御空に 日の御旗） ⑭ 泣くな我が妻…… ⑫ どうせ死ぬなら…… ④ 田原坂なら…… ⑤ 春は桜よ……</p>
(6)	<p>田原坂 豪傑節 ① 雨は降る降る…… ⑥ 右手に血刀…… ④ 田原坂なら…… ⑨ 西郷隆盛…… ⑦ せくなさわぐな…… ⑭ 西郷隆盛 上野の山で 花の吹雪に 濡れて立つ ⑫ どうせ死ぬなら……</p>
(7)	<p>① 雨は降る降る…… ⑥ 右手に血刀…… ⑩ 山に屍…… ⑪ 第二句（いとしの駒よ） ⑭ 泣くな我が妻…… ⑫ どうせ死ぬなら……</p>

(注) 書名欄の番号は以下のものに対応する。

- (1) 服部龍太郎『日本民謡集』現代教養文庫 一九五九年
- (2) 熊本の風土とこころ編集委員会『熊本の民謡』熊本日日新聞社 一九七八年
- (3) 『日本民謡大観 九州篇(南部) 北海道篇』日本放送出版協会 一九八〇年
- (4) 植木町史編纂委員会『植木町史』植木町 一九八一年
- (5) 毎日新聞学芸部編『民謡風土記』時事通信社 一九八二年
- (6) 長田暁二・千藤幸威編『日本の民謡 西日本編』現代教養文庫 一九九八年
- (7) 仲井浩二郎『口訳 日本民謡集』蒼洋社 一九九九年

以上の(1)～(7)とカセットテープを合わせた八種の資料のすべてに見える歌詞は、

①雨は降る降る……

⑥右手に血刀……

の二首、八種の資料中、七種にまで見える歌詞は、

⑧草をしとねに……

⑩山に屍……

の二首である。

二 「田原坂」の成立

『日本民謡大観 九州篇(南部)・北海道篇』(日本放送出版協会 一九八〇年)には次のような解説がある。

田原坂

熊本市

○雨は降る降る人馬は濡れて 越すに越されぬ田原坂

田原坂のハルは古語で平地の意味である。ここは熊本市の北十軒ほどの小高い丘で、一体は蜜柑畑になっているが、この鹿本郡植木町田原で明治十年二月西南戦争最大の激戦が展開されたのである。田原坂は木ノ葉（玉名郡玉東町）から植木へ抜ける坂で、ここは南の金峰山山地と、北の国見山、木葉山の山地が低山ながら西の玉名平野との間を通って、熊本平野への西の入口となっている要衝の地である。熊本城を囲みつつ尚北上する薩軍と、救援に南下する官軍とがこの隘路で激突した。何日にもわたる白兵戦の末、薩軍は敗退したが、この戦闘で官軍の死傷者は三千人、薩軍二千人、弾丸は一日に二十五万発から四十万発というから当時といわず大変な戦いだったのである。

賊軍となった薩軍の死者の供養は公式に行われなまま年が過ぎたが、明治三十七、八年の日露戦争にあたり、拳国一致の時勢を期して、熊本日日新聞社が、田原坂戦没者追悼のためとして、本音は薩軍戦死者供養のために「田原坂」という唄を作ることになった。

歌詞は当時人氣のあった紙上懸賞募集の方法をとったところ、応募者には詩人あり、学生あり、中でも多かったのが、日清、日露戦の傷病兵だったという。そして応募歌詞に新聞社の入江某が数点を加え、今日の形にととのえたといわれている。もつとも

○雨は降る降る陣羽は濡るる ここは古戦場田原坂

という歌詞はそれ以前からあり、これは明治二十二年秋、田原坂の古戦場をたずねたかつての薩軍の一人である

中学教師の岡本源次が、往時を思つて泣きながら作ったものということだ。そして、この懸賞募集の折に

○雨は降る降る人馬は濡れる 越すに越されぬ田原坂

○右手に血刀左手に手綱 馬上ゆたかな美少年

○山に屍河に血流る 肥薩の天地秋さびし

○草を褥に夢やいずこ 明けのみに空に日の御旗

の四首は入江某が作る。そして以下の

○泣いてくれるな可愛の駒よ 今宵忍ぶは恋でなし

○泣くな我が妻勇めよ男の子 戦に立つは今なるぞ

○どうせ死ぬなら桜の下よ 死なば屍に花が散る

○田原坂なら昔が恋し 男同志の夢の跡

○春は桜よ秋なら紅葉 夢の田原の草枕

○退くに退かれぬ田原の嶮は 男涙の小夜嵐

などはその応募作である。

これに曲をつけたのは、当時熊本の大和検番にいた芸者留吉だという。ただこの曲はまったくの創作ではなく、何か土台になる曲があったようだが不明である。今日熊本人は、この唄を会津の白虎隊と同じような感覚で謡っている。

『日本民謡大観』は、民謡研究における偉大な仕事であり、この記述が詳細なためか、この後の民謡辞典の類はみ

な当該記事を引き、それが広く浸透しているが、確証はない。

『日本民謡大観』以前にも、例えば第一節で引用した書・服部龍太郎『日本民謡集』（現代教養文庫 一九五九年）には「この曲ができた由来については、明治三十七年日露戦争が勃発したとき、同時の武ばった氣勢をあげるために、九州日日新聞の記者が作詞し、熊本留守吉という芸妓がふしをつけたという説がある」との簡略な言及がある。

さて、『日本民謡大観』の記述のうち、明らかに間違いとして指摘できるのは「泣いてくれるな可愛の駒よ 今宵忍ぶは恋でなし」の一首の成立についてで、当該歌は第三節に述べるように、「万朝報」の「俚謡正調」欄の当選作である。さらに、作曲者とされる「当時熊本の大和検番にいた芸者留吉」という表現にも矛盾がある。昭和九年十月五日付九州日日新聞に「熊本市にいよゝゝ大和検番誕生 集る美型八十余名」と題する記事が見え、明治三十七、八年当時、「大和検番」は存在しないからである。確かに留吉は大和検番の芸妓で、例えば昭和十年三月二十四日付九州日日新聞には新興熊本大博覧会の演芸館における大和検番の催し物の番組が載るが、その中に「清元 四季三葉草」「長唄 大薩摩」の唄の担当として、また「常磐津 幾菊蝶初音道行」の三味線の担当として名が見える。また、昭和十年二月五日付九州日日新聞ラジオ欄には次のようにあり、「田原坂」の歌い手として留吉の名が見えている。

けふのプロから 新民謡 午後八時半

大和検番

唄 真弥・留吉

三味線 おしん・照代

伴奏 K・B・Bアンサンブル

熊本民謡「田原坂」小考

○肥後五十四万石

(詞章省略)

○田原坂

- 一、雨は降るくく人馬はぬれる 越すに越されぬ田原坂
- 二、右手に血刀左手に生首 馬上ゆたかに美少年
- 三、山に屍川に血流る 肥薩の天地秋淋し
- 四、草をしとねに夢や何処 明けの御空は日の御旗

○東雲節

(詞章省略)

○火の国小唄

(詞章省略)

なお、ここで注目されるのは、「右手に血刀左手に生首 馬上ゆたかに美少年」の歌詞で、普通「左手に手綱」と歌われるところが、「生首」となっている点である。この点については、平成七年十一月二十四日付熊本日日新聞夕刊「雨は降る降る 民謡田原坂さんぽ2 左手に生首 “最古”のレコード発見」に記述がある。昭和五、六年に録音されたという現存最古の「田原坂」のSPレコード(歌・留吉 三味線・朝菊 日東レコード)の歌詞が「左手に生首」であることを紹介、レコードの所蔵者大矢野明氏の「推理」として「酒席で歌うにはあまり気味のよくない“生首”は、“手綱”に改められていった」とする。さらに「ベテラン芸者のあや子さん(六八二)熊本市」の「証

言」を紹介して「確かに「生首」の歌詞は聞いたことがあります」と証言した。「あたしたちがお座敷で歌うのはもちろん、左手に手綱」ですけど、年取ったお客さんが座興で歌いなはるときに、「生首」と言われていた。大水害の後のころ」というから、昭和三十年前後だろう。」とする。

昭和十年といえは、菊池寛が「豪傑節」を聴いたことを『話の芥箱』に記した年だが、菊池の記述は「手綱」になつており、一方、同じ年のラジオでは「生首」と歌われていたので、両者は並行して行われていたのであろう。その状態は先の新聞記事によれば昭和三十年前後までは続いていたらしい。菊池の改変（左手に十字架）「胸には十字架」も、ちょうど歌詞に二種類ある部分に施されており、偶然ではあろうが、一首のうち、この第二句目は歌い替えを行いやすい箇所であつたとは言えようか。

『日本民謡大観』の説を確認するために、九州日日新聞の明治三十六年～四十年までのマイクロフィルムを回したところでは、該当する記事を見つけることはできなかつたが、明治三十七年二月の開戦以来、「征露軍歌」「征露の歌」「遼陽祝勝の歌」「艦隊歌」といった戦意高揚のための歌謡や、戦死者追悼の歌謡が紙上にしばしば見られる。また、明治三十七年八月二十九日には旅順陥落祝歌を一般募集する旨の社告が載り、旅順開城を受けて、明治三十八年一月二十八日に「旅順陥落軍歌」として選ばれた一作品が発表されている。このような状況からすると、紙上懸賞募集による方法はいかにもありそうなことと思われる（戦争中も、毎月、狂句・狂歌・雑俳・和歌・小品文などの懸賞募集が行われている）。『日本民謡大観』の記述は何を根拠としているのか、定かではないが、聞き取り調査によるものとすれば、あるいは、紙上懸賞募集の時期について錯誤があつたものかも知れない。この点は問題を後に残しておく。

三 「田原坂」の歌詞——「万朝報」との関わり——

第一節でも参照した参考文献・植木町史編纂委員会『植木町史』（植木町 一九八一年）には、「田原坂」について次のような記述が見られる。

「西南の役は明治十年二月二十二日に起り、明治十年九月二十四日に終っている。なかでも最激戦の地が田原坂の戦いであった。

「雨は降る降る 人馬はぬれる 越すに越されぬ田原坂」の郷土民謡は当時の激戦をまざまざと思い出させる。

この歌の起りは、当時薩軍に味方した熊本隊の士族岡本源次が戦後済々黌の教師となり生徒を連れて田原坂に遠足し、古戦場を偲び、

「雨は降る降る 人馬はぬれる ここが古戦場の田原坂」

と歌ったのがもとでたと口承されている。その後、替歌が次々と生れ、

「右手に血刀 左手に手綱 馬上ゆたかに美少年」

「山に屍 川に血流る 肥薩の天地 秋さびし」

「草をしとねに夢やいづこ 暁のみ空に 日の御旗」

等の歌詞が歌い継がれてきた。

その後、明治三十七、八年の日露戦争のころ、黒石涙香が経営した万朝報という新聞に入選したのが、負傷帰休兵黒岩三平の

「啼いてくれるな　いとしの駒よ　今宵忍ぶは恋でなし」であり、同時に入選したのが「笑歌坊」なる人の作

「一の城とり　二の城おとし　あとは御旗の風に散る」である。

さらに、昭和十年前後、当時の九州日々新聞（現熊本日々新聞）の「新作田原坂」の公募に当選したのが、「山本松夫」作の

「追うて追われて　討たれて討って　雨も血となる田原坂」である。

こうやって一連の民謡田原坂が郷土民謡として歌いつがれて来たという。

古老の口承と民謡研究家山口白陽氏の御教示によるもので、文献に徴するもさだかでない。それがまた民謡の宿命でもあろうか。（高木盛義）

岡本源次の場合は『日本民謡大観』にも記されているが、根拠は定かでなく、該当する記録は見いだせていない。しかし、「万朝報」のことと、最後の「新作田原坂」のことは新聞のマイクロフィルムを回すことよって確認することができた。「新作田原坂」については第四節で考察することとして、以下「万朝報」の「俚謡正調」欄について述べたい。

『植木町史』が指摘する通り、「啼いてくれるな……」と「一の城とり……」の二首は「万朝報」の「俚謡正調」欄当選作である。明治三十七年十一月二十八日付「万朝報」に次のような募集記事が掲載された。

正調の俚謡を募る

昔より日本に三大詩形あり、其一は五七五七七の三十一文字式なり之を和歌と云ふ、其二は五七五の十七文字式なり、之を俳句と云ふ、其三は七七七五の二十六文字式なり、之を関東にては「ドッー」と云ひ関西にては「ヨシ此」と云ふ、猶ほ各地各様の称呼あるべし、其の何の意たるを知らざるも、要するに日本に固有なる、且最も普及せる俚謡なり

右のうち三十一文字式と十七文字式とは上下一般に行はるれど、独り二十六文字式に至りては士君子之を顧みず、我が朝報の如きも夙に通俗文芸に相当の地歩を得せしめんが為に和歌俳句より下りて狂歌、狂句、謎々、語呂合せをまで募集して発表せるも独り「ドッー」のみは斥け来れり、朝報発足以来四千余号に及び一回もドッーなる者を紙上に掲げざるは読者の知りて而して或は怪み或は激賞する所なり

何故に「ドッー」は斯の如く貶せらるゝや、他無し、近来其の調の墮落して単に遊女冶郎の心意気を述るか、然らざるも卑猥取るに足らざる如きに至りたればなり

然れども俚謡の本来は斯の如き者に非ず、俚謡は平民詩なり、以て民俗を知る可く、時代と社会との風尚を察す可し、孔子の選したる詩三百、經典として三千載に垂るゝも実は当時の俚謡のみ、吁、ドッーは俚謡の末にして俚謡を汚辱するものか

近く我が潮来節に至るも猶ほ聞く可きものあり、其以前は和歌の優美と俳句の簡雅との外に大和民族の勇邁なる気風より出で、或は天地の美を詠じ、或は人情の妙を謳ひ、聞く者をして一唱三嘆せしむるも有りき、今にして之を俚謡本来の正調に復らしむるは、縦し風教を益するほどの力無しとするも、必ずしも無用の事にあらじ

俚謡は和歌にも俳句にも優る点なきに非ず「ウタ」と云ふ者の本来は、発声して「ウタフ」に在り、俳句は短くして謡ふに便ならず、和歌は特別の作曲を要す（「君が代」の如く）独り俚謡は各地到る所に古来謡ひ来れる種々の曲あり、得るに随ひて如何やうにも謡ふ可きなり、是れ大に「ウタ」の本旨を得たる者に非ずや

以上の意味に於て、朝報は今日より「俚謡正調」と題して二十六字式の「ウタ」を募り、嚴重に精選して、真に俚謡の正調に叶へる者を紙上に掲げんとす、賛成の方々は其作歌を郵便はがきに認め「俚謡正調選者」に宛て、贈られよ、精選の結果紙上に掲ぐ可しと認むる者あらば每一首に対し金一円の報酬を贈る

この趣意書により応募された二十六文字都々逸形式の作品は、明治三十七年十二月一日から連日掲載された。「俚謡正調」欄はおおいに注目され、昭和十五年まで（「万朝報」は昭和十五年八月一日を最後に東京毎夕新聞と合併する。マイクロフィルムで確認できた最後の「俚謡正調」欄は昭和十五年八月二十日のものであった。八月二十日の「俚謡正調」欄には「投稿先 目黒・自由ヶ丘石井迷花宛」と見え、この日が最終という認識は撰者にもなかったものと思われるが、この後作品が掲載されることはなかった）、三十六年間にわたって続いている。掲載作品は半年、一年といった単位で書籍にまとめられ、出版もされた。選者の一人であった湯朝竹山人は、「万朝報」から都々逸が広まり、多くの新聞、雑誌で募集されるようになったことを指摘して次のように述べている。

日露戦役の時分、万朝報が『俚謡正調』を募集し、在来の所謂都々逸的劣調を破棄して、大いに正調振りを發揮した。それより他の新聞にも和歌、俳句等を募集すると同様に、都々逸を募集掲載する風を生じ、雑誌の中にも亦これを真似て来たもののあることは、人の知る通りである。（『趣味の小歌』ヘアルス 大正九年～一四七頁）さて、問題の「啼いてくれるな……」と「一の城とり……」の二首であるが、前者は明治三十七年十二月九日付、

後者は明治三十八年一月二十二日付「万朝報」に載ったもので、「俚謡正調」欄掲載の比較的早い作品である。それぞれの紙面を引用する。

俚謡正調

啼ないて呉くれるな可愛かあいの駒こまよ　こよひ忍しのぶハ恋こいぢや無い　負傷ふじやう帰休兵　三平

選者曰く一騎夜に乗じて營を出づ、忍び行く先は恋に非ず敵の陣なり、愛馬嘶かんと欲して勇士立髪を撫で、諭す、偵察の苦心思ふ可し、此の如き情調双絶の名句は、実境に臨む者に非れば作る能はず

選外余景

いきて還らぬ覚悟の人は　死なぬうちから穴住居あなずまゐ　千葉　松風女

(明治三十七年十二月九日)

俚謡正調

入選◎印には一円△印には其四分之一を報酬す

◎一の城とりや二の城落つる　あとハ御旗みはたの風に散る　羽後　笑歌坊

選者曰く最上の行軍歌、又曰く旅順沙河一の城にして浦鹽哈爾賓一の城か、抑又露国ろこくが一の城にして、○国こくが二の城か、旭日旗の向ふ所風靡せざるは莫し、愉快

△かざす火鉢の手を引込めて　雪の歩哨を思ひ遣る　日本橋　山本

△吹けよ木枯し揺げよ木立　鷺の古巢の抜ける程　千葉　安四貞

△春日うらら〜ウラルの山に　桜さくのも近いうち　越後　斧丸

△露西ろしやの夫婦の誓ひを聞けば　捕虜になるまで離れまじ　市谷　張武生

(明治三十八年一月二十二日)

「万朝報」の「俚謡正調」欄により、この二首の成立期ははっきりしたのだが、これがいつから「田原坂」として歌われるようになったのかは依然詳らかでない。管見では言及しているものがないが、この問題を考える上で興味深い記事が見出された。昭和十年三月二日付九州日日新聞である。この日の新聞六面に「俚謡正調」の名吟 日露戦役当時を偲ぶ 熊本市 大島浪之助」として七段にわたる記事がある。冒頭に、

明治三十七年十一月二十八日、当時帝都の新聞界を風靡してゐた万朝報は「俚謡正調」と題して二十六文字式の歌を懸賞募集し、選者は黒石涙香、賞金は一円（現今の五円にも比すべきか）とすることを発表した。時恰も日露戦争の真最中なので戦争に因んだ名句名吟尠からず、戦争美、戦争苦、国民の意気、貞女の覚悟、講和に対する国民の不満、凱旋の喜びなどをいとも巧に表現した所謂一種の戦争文学が生れた。その中から三十年後の今日、猶筆者の感興を湧かすもの数十句を選び挙げて当時を偲びたいと思ふ。

とあり、以下六十八首の紹介がある。そしてその中にまさに「啼いてくれるな……」と「一の城とり……」とが含まれるのである。あるいは、当該記事が「田原坂」に「俚謡正調」当選作二首が取り入れられるきっかけになった可能性があるのではないか。先にも触れたが、「俚謡正調」掲載作品は書籍の形でも出版されており、当該二首の掲載された『俚謡正調 第一集』（楽世社）は明治三十八年にすでに出版されているが、熊本の人々へ強く訴えるものとして、九州日日新聞の当該記事は看過できないものではないか。また、もし、これ以前に、「啼いてくれるな……」と「一の城とり……」とが「田原坂」として歌われていたならば、筆者の何らかの言及があつてしかるべきであろう。大島浪之助は六十八首のうち、七首について、「筆者曰く」の形で注や評を加えているから、自らのコメントを一切

書かないという方針だったわけではない。すなわち、明治三十七、八年には成立していた歌詞を、民謡「田原坂」が取り入れたのは、昭和十年以降だったのではないか。第四節に述べるように、昭和十年前後は「田原坂」が特に脚光を浴びた時期であることも思い合わされる。推測の域を出ないものであるが、一つの可能性として指摘しておきたい。

なお、九州新聞昭和十一年十月二十三日二面の「面白課題ニユース拝聴」欄は、読者の質問に答える形で「啼いてくれるな……」が「万朝報」に掲載されたものであることを指摘している（掲載日には触れない）。この記事は「田原坂」の歴史について触れており、次のように述べる。

昭和二年の籠城五十年祭を前にして新しい田原坂節を作らうといふことになつて古謡のよきところをひいて現在の歌曲を作つた、三味線の節付は留吉さんがやつた、在来の数節では少ないといふので後の数節はその時先年迄九州日々新聞にゐた故人の入江白峰氏が作り足したものである、

「在来の数節」が何を指すのか不明であるが、当該記事の冒頭に「雨は降る降る……」「啼いてくれるな……」「右手に血刀……」が引いてあり、その後、引用部分までの書き方からすると、少なくともこの三首は「在来の数節」にあたるようである。「後の数節」は当然それ以外のもので、新聞記者入江白峰（『日本民謡大観』は「入江某」としており、「雨は降る降る……」「右手に血刀……」を入江作とするから、当該記事とは齟齬がある）の作とされているが、この筆者や昭和十一年当時の読者が思い浮かべたのはどの歌詞であったのか詳らかでない。いずれにせよこれは『日本民謡大観』が明治三十七、八年ごろのこととして記していたことを、そのまま昭和二年のこととしたものである（ただし紙上懸賞応募のことは書かれていない）。確かに昭和二年十一月二十六、七両日にわたって、西南戦争五十年

祭が盛大に行われている。両日前後の九州新聞、九州日日新聞には詳細な記事が載り、催し物として武道、相撲、自転車競争、花火、展覧会、活動写真、講演会、庭球、能楽、演奏会、熊本城攻防演習、駅伝、競馬などのあったことが知られる。しかし、昭和二年一月から十二月まで九州新聞、九州日日新聞のマイクロフィルムを回した限り、「田原坂」についての記事は見いだせず、先の記事を裏付けることはできなかった。

四 「新田原坂」——昭和十年前後——

第三節に引用した『植木町史』は、「昭和十年前後、当時の九州日々新聞（現熊本日々新聞）の「新作田原坂」の公募に当選した「山本松夫」作の「追うて追われて 討たれて討って 雨も血となる田原坂」を紹介していた。「文献に徴するもさだかでない」とするが、これは九州新聞（九州日日新聞ではない）で確認できる。

昭和十一年四月十一日付九州新聞夕刊二面に三段抜きで「民謡田原坂節の新歌詞募集」記事が掲載された。次に引用する。

民謡田原坂節の新歌詞募集

同感の士の応募を望む

我等の郷土、熊本が持つ民謡の中で「田原坂節」ほどローカルカラーの豊かな大衆的魅力に富んだ歌曲はない、然るに其歌詞に至つては従来歌ひ囃された「雨は降るく」以下五六種のものがあるのみで他に適当な替歌の生れなかつたことは森都民謡界のため甚だ遺憾とす所であつた、本社茲こゝに見る所あり、左記規定により之れが優秀

なる歌詞を公募しその出来栄はえによつては広く全国的に宣伝普及せしむることとなつた、希くば、同感の士奮つて応募あらんことを

募集規定

△形式、七、七、七、五の俚謡調

△題材、西南役、菊池氏、熊本城、阿蘇山、球磨川、肥後気質等々の全国的に著名な材料を選ぶこと（応募歌詞の数は各人の随意とす）

△選歌、本社編輯局にて厳選し入選歌詞約二十を決定す

△締切、四月三十日

△発表、五月上旬

△宛名、投稿は一題毎に官製ハガキに明記し本社編輯局宛送付のこと、但し匿名にても可
△其他、入選者には薄謝を呈す、但し応募歌詞は返戻せず、入選歌の著作権は本社に帰す

九州新聞社

そしてこの入選作十五編が発表されたのは、同年五月十三日のことであつた。「本社募集田原坂節の新歌詞 入選の名作十五篇 三千五百の応募歌からこの玉篇 近く全国に普及徹底せん」の見出しで入選歌詞十五編が紹介されている。以下、歌詞を掲げる（*は私に付した）。

*燃ゆる火の山 おいらが阿蘇は 意気いきと情なまけの 烽火台のろしだい

玉名郡横島村

岩本一瓢

*城は焼けても 清正公の 勲芳し 楠若葉

熊本市出水町

小池敏雄

吼ゆる瀬の音 球磨川下り 唄で乗切る 槍倒し

八代郡八代町

村田芳郎

*槍は千本 純忠菊池 二十四代の 揃ひ鷹

玉名郡横島村

岩本一瓢

*雲か山かの 天草島に 男度胸の 土用浪

満州新京

富岡生

誉れ細川 流をくんで 肥後は武の国 文の国

東京渋谷

抜天生

小手をかざして 銀杏城を 仰ぐ朱鞘に 花吹雪

熊本市

高橋桂舟

追ふて追はれて 討たれて討つて 雨も血となる 田原坂

球磨郡人吉町

山本松夫

錦旗進めて 肥筑の山河 散るや菊池の 山桜

熊本市春竹町

山内忠次郎

菊池城山 桜のかすみ 仰ぐ御旗は 揃ひ鷹

飽託郡清水村

橋本留喜

肥後に生れて 青首育ち 腰にや玉散る 胴田貫

阿蘇郡宮原町

森坂清輝

阿蘇の御神火 天まで焦がす 昔ながらの 火の柱

下益城郡中山村

米田芳枝

肥後は火の国 阿蘇不知火に 意気と情の 燃ゆる国

朝鮮清津図書館

森田勝美

*球磨の早瀬は 度胸で下ろ 見たか船頭衆 横煙管

菊池郡河原村

駒田真也

鮎の立つ瀬に 河鹿が鳴いて 月の球磨川 湯のけむり

縣本市中坪井

高山龍太郎

この後、九月二十日には、金奴の唄でビクターよりレコードが発売された。吹き込まれた歌詞は、上に*を付した五首であった。B面には小野巡による「豪傑節」が入られたという（昭和十一年九月十四日付九州新聞・「豪傑節」の歌詞は掲載されず）。さらに、レコード発売日と同じ九月二十日には、大和座における入江舞踊新作発表会で入江圭志の振付で「田原坂節」新歌詞が舞われた（昭和十一年九月十七日付および同二十日付九州新聞）。この新「田原坂」はかなり人気を集めたらしく、九州新聞は再び田原坂節の新歌詞を募集する（同年九月二十六日付）。

郷土の新歌詞を募る 高らかに歌へ郷土の誇りを

讃へよ我が町我が村

我が社が今春懸賞募集した田原坂節の新歌詞を日本ビクターの新進名歌手金奴によつて吹込ました所謂新小唄「田原坂」のレコードはビクター本社の意気込物凄く今や全日本的に臨時発売されたので非常時日本にふさはしい素朴豪快な節調と歌詞により今將に全日本を風靡して田原坂節時代を現出せんとしてゐる、我が社がこれこそは我等の郷土熊本が持つ代表的の民謡として全国的に紹介宣伝する価値ありと確信してレコード化した理想が今將に実現せんとしてゐることは欣喜の至りである、同時に田原坂節の本場たる我が熊本に於ては全国的のもの以外に郷土人士のみにより愛唱さるべき幾多の地方的郷土的の歌詞を持つてもよいと思ふ、依りて我社は第二段の試みとして県下の各町村の誇りを読み込んだ田原坂節の新歌詞を募集して郷土人士に献ぐることにした、左記規定熟覧の上奮つて応募あれ

規定

- 一、町村の誇りを歌へるものにして田原坂節の調子に合ふ七七七五の歌詞
- 一、応募歌詞は必ず官製葉書に認め一枚に一つだけ記載のこと
- 一、入選、本社編輯局にて町村毎に一つを厳選す
- 一、賞、入選者には本社特製メタルを贈呈す
- 一、締切、十月十日
- 一、宛名、本社企画部

一、入選発表、十月二十日

ところが、応募状況が悪かったのであろうか、十月二十日はおろか、マイクロフィルムを回したところでは同年十二月末に至るまで、入選作は発表されなかった。「町村毎」というのは、範囲が狭すぎて、歌謡として共感を得にくいであろうことは容易に想像がつく。おそらくこの企画は失敗に終わったものと思われる。

しかし、昭和十年前後が「田原坂」時代」の様相を呈していたことは確かであろう。九州新聞による懸賞募集とそのレコード化の他、少しさかのぼって、昭和九年十月には、「田原坂」の映画化の企画が持ち上がり、撮影が開始された。昭和九年十月七日付九州日日新聞には「大阿蘇の山懐で 第一映画のロケイション 伊藤大輔氏の脚色で 俚謡——田原坂——愈よ映画に」の見出しの記事が出ている。冒頭を引用すると、次の如くである。

明治十年の西南戦役をテーマに「馬上豊かに美少年」の俚謡『田原坂』を生かし、全体の背景を大阿蘇にとつた超特作映画を製作しやうと云ふ——先般日活を脱退結成した第一映画社の計画により伊藤大輔氏の原作、脚色に成る「煙はなびく」撮影のため先発として監督犬塚稔、技師吉田清太郎、編輯石本純吉の三氏は去る三日来熊……
(以下略) ……

この後、十月二十六、二十七、二十八日にわたって、映画「煙は靡く」の「ロケイション素見記」が掲載されている。主な出演者は中野英治、歌川絹枝、大倉千代子らであった(ただし、昭和十二年十二月まで同紙のマイクロフィルムを回した限り、映画の完成、封切に関する記事は見出せなかった)。

このように「田原坂」が注目されたのは、先に引用した昭和十一年九月二十六日付九州新聞に「非常時日本にふさはしい素朴豪快な節調と歌詞」とあるように、戦争に向かって軍備を拡張していく時代にあつて、西南戦争を美化し

て歌った歌詞がもてはやされた面があったろう。昭和十二年は西南戦争六十周年にあたる時でもあった。昭和十一年のうちから、九州新聞、九州日日新聞には西南戦争に関する様々な記事が掲載されている。

「田原坂」という一つの歌謡は、いつでも同じように歌われていたわけではなく、特に注目される時期を持つていた。当然予想されることながら、時代の要請によって、様々な変容を遂げつつ、歌い継がれてきたのである。

現在の植木町田原坂資料館では、田原坂の戦いについて、再現ビデオを観ることができ（二〇〇四年二月十三日鑑賞）。明治十年三月四日から二十日までの、田原坂の激戦の大半は雨の中で戦われた。ロシアの軍服に革の靴、武器は雨でも発射できるスナイデル銃中心の官軍に対し、薩軍は装備は木綿に草鞋、雨では不発のエンピール銃が武器の中心であって、雨には極度に弱く、天候に泣かされたという。ビデオでは戦の再現場面に、「雨は降る降る 陣場は濡れる 越すに越されぬ 田原坂」の歌が流れ、ナレーションでは、田原坂三の坂に集中させた陣地を「陣場」として、雨の田原坂の塹壕戦の激しさを歌ったという解釈が示される。観客はあたかも、明治十年当時、この「田原坂」の歌が薩軍の間で歌われていたような錯覚に陥る。また、「右手に血刀 左手に手綱 馬上ゆたかな 美少年」の「美少年」についても、同ビデオでは当時十五歳の東野孝之丞の名を挙げていたが、他にも三宅伝八郎（二十歳）、村田岩熊、高橋長次（十五歳）、高田露（二十四歳）など、様々なモデル説がある（『田原坂の戦い』植木町二〇〇一年）。このように、一つの歌謡が様々な物語を付加されていく様相も見受けられ、「田原坂」は生きた歌謡の持つ力を示すものとして、興味深い問題を多く含んでいるといえよう。

五 おわりに

以上、民謡「田原坂」の歌詞について考察してきた。成立については不明の点が多いが、従来の説のうち、明らかに誤りについては、多少の訂正を施すことができた。また「万朝報」入選作についてはその発表年次を確認し、九州日日新聞での紹介記事を指摘した。現在歌われているすべての歌詞が同時に成立したものではなく、時間差をもって歌い出されたことが窺われよう。レコード資料の活用や、範囲を広げた新聞調査などにより、さらに明らかになることもあろうが、今後の課題として稿を閉じたい。

〔付記〕 田原坂現地調査にあたっては、植木町役場、観光協会の関係各位に大変お世話になった。特に植木町役場商工観光課課長角田義照氏、植木町観光協会事務局霍川和代氏の御厚意に心より感謝申し上げます。